

〇二〇二年度中国化学会 大会シンポジウム  
教材としての『史記』

基調講演 京都教育大学名誉教授 青木 五郎  
発言者 京都府立桃山高等学校 谷川 司  
静岡県立浜松南高等学校 安立 典世  
司会・コメンテーター 京都教育大学 谷口 匡

シンポジウム「教材としての『史記』」について

谷口 匡

二〇二二年度中国化学会シンポジウムは、前年度のシンポジウム「『老子』を高校・大学の教室でどう読むか」を受けて、やはり漢文教育をテーマにし、教材としての『史記』の可能性を考えることになった。松村茂樹、加藤一郎の両企画委員を中心に計画が進められて右のような大枠が決まり、大会当日は谷口が進行役を務めた。

今回は会場である京都教育大学の特色を生かし、まず同大学で長らく『史記』を中心にした研究・教育を行ってきた青木五郎会員に基調講演を依頼し、それを受けた報告は現職の高校教員によるものとした。

高校教員兩名のうち安立典世会員は大学で中国文学を専

攻し、すでに学会誌等にも漢文教育の実践報告数篇を発表している。一方の谷川司氏は大学時代は教育学部で国文学を専攻し、卒業後、京都教育大学附属高校在職中に同大学の大学院の国語教育専修を修了、修士論文のテーマは評論文の指導法であった。すなわち前者の報告はいわば漢文教育を専門とする立場での先進的事例、後者のそれは漢文教育を専門としない立場での一般的事例を想定し、さまざまな側面から議論が深められることを期待した。

当初は筆者も発言者の一人として、小学校等における出前授業での実践を紹介する予定であったが、討論の時間をしっかりと確保するために、報告は上述の三名のみとし、司会兼コメンテーターという形で加わる方式に変更した。

なお特筆しておかなければならないのは、本シンポジウムが京都教育大学の後援も得て公開の形で行われたことである。

青木会員と谷口の受業生



を中心に関係者に広く案内したところ、当日は学会員以外に京教大卒業生を中心とした三十余名の一般参加者があり、盛会のうちに企画を終えることできた。学会を地域に開き、その成果を還元するという意味でも、これから、とくに地方で本学会を開催する場合の一つのあり方として、公開シンポジウムは有効ではないかと思われた。

講演・報告の具体的内容については三名それぞれによる要旨に譲るが、参加した学生の一人は、『史記』や司馬遷に対する見方が変わった。……今まで漢文教材について全く思うところがなかったが、今回シンポジウムに参加して複数の視点を吸収できた」という感想を述べており、公開するに足る充実したシンポジウムであったと考えている。

ただその反面、三名それぞれの熱のこもった発言が少しずつ時間超過したために、討論の時間が十分とれなかった。この点は進行役であった私自身の責任に帰するが、結果的には会員相互の中だけで質疑が行われ、期待していた一般参加者、とりわけ現職の高校教員等からの発言を聞くに至らなかったのが残念だった。今後の反省点とし、次に引き継いでいきたい。

(京都教育大学)

『史記』には、上は帝王から下は遊俠無頼の徒まで、実にさまざまな人間が登場する。それらの人間は、歴史に名を留めるくらいだから、多くは烈しい個性の持ち主であり、その烈しい個性によって、当時の社会に大きく関与した。

人間の生き方に深い関心をもち、人間の運命を凝視した司馬遷は、それらの人間のもつ個性を適確にとらえ、さまざまな個性の織りなす社会を実に生き生きと描き出している。換言すれば、『史記』に描かれた人間像は、抽象的に論じられた人間の生き方でもなければ、歴史上に登場した人物の平板な記録でもなく、司馬遷の透徹した人間観や、冷厳な歴史観を濾過することによって、人間の典型にまで昇華されているということであり、この点にこそ『史記』が単に歴史書としてのみでなく、文学的享受にも堪えうるものとして、高い評価を受けてきた最大の理由があるといつてよい。

従って、『史記』教材を用いての漢文教育も、歴史事実の正確な把握を第一義的に考えるのではなく、歴史上に展開される物語や、歴史時代を生きぬいてきた人間の生き方

に対する文学的アプローチを志向するものである、ということができよう。私はこの見地に立つて、『史記』教材の主要な教育目標を

一、表現叙述の文学性の検討

二、典型的人間像の把握

三、司馬遷の人間観、歴史観の投影

の三点にあると考え、教材化されることの多い「項羽本紀」や「廉頗藺相如列伝」「伍子胥列伝」などを例に具体的に考察し、教室での指導の参考に供したいと思う。

なお、テーマの性格上、広く現場の先生方にも参加していただくのがよいと考え、シンポジウムを公開にしていた。 (京都教育大学名誉教授)

漢文教材の「ポイント駆動の読み」のために

—「項羽と劉邦」を題材に—

谷川 司

漢文を専門としない教員として、漢文(今回は『史記』)の授業に臨む基本的なスタンスは次の二つである。

漢文を語学として捉えること。所謂句法・句形とは別に文や文章の構造を正確に理解することに努めたい。

漢文教材を文学テキストとして読むこと。テキストに共感や違和感を感じ、そこに一つの世界を構築する者を読者と呼ぶならば、生徒には『史記』の読者となって貰いたい。

二〇一一年六月に二年生「古典」の授業で、「項羽本紀」より抜粋された教科書教材「項羽と劉邦」(「鴻門之会」

「四面楚歌」「烏江亭」を中心とした教材)を扱った。また今年六月(授業から一年後)に彼らから「教材「項羽と劉邦」についての感想」を書いて貰った。シンポジウムでは、授業時に立ち止まったいくつかのポイントを紹介し(A)、授業後の生徒の感想から教材の価値を考察した(B)。

A 本稿では「鴻門之会」前半に限って、読みのポイントを列挙する。①「項羽大怒」の理由は論理的には軍事・人事・財務の三点にある。②曹無傷の讒言と范増の進言とは明らかに矛盾する。③項羽はその矛盾点を確かめず(あるいは気づかず)、沛公に先を越された苛立ちのなかに、怒りの論理的な対象を失っている。④沛公は同盟軍であることを主張しつつ、呼称で下風に出ること、自身の成功を偶然とすること、懷王の言を引用し正当性を柔らかに主張することで、項羽の情的な怒りのやり場を宙に浮かせた上で、スケープゴートの設定を提案している。⑤項羽は曹無傷の名を出すことで、その提案を受けている。⑥この時、范増

の論理は全く破綻していない。つまり項羽はこの時点ですでに范増の言葉を重用していない。

B 生徒の感想を見ると、明らかに「鴻門之会」より「四面楚歌」「烏江亭」に人気がある。但しそれは「鴻門之会」あつての「四面楚歌」「烏江亭」である。単元名こそ「項羽と劉邦」であるが、やはり一篇の「項羽本紀」として、生徒は読む。力関係のねじれを経て、学習者の読みは人間・項羽（あるいは項羽の運命）に集約されてくるようだ。教材文の分量（長さ）や人物関係の複雑さに困難を訴える生徒もいる。人物の呼称を整理し、両陣営の陣容を図式化するなどの工夫が求められる。ここがクリアできれば、登場人物の人間関係や人間像に興味を抱く生徒も多いだらう。「鴻門之会」における項羽のチームと沛公のチームの差異や「四面楚歌」「烏江亭」における項羽や亭長の人間性と沛公方の参謀や将校たちの人間性の差異が生徒たちの読みどころであつたようだ。また、色彩や肉体の動き、音の響きなどが印象的であつたとする生徒もあつた。様々な人間の意志の力に満ちた生き方や言葉の力に感じた想いを、授業後一年を経て尚、彼らが思い起こし得る所に、教材「項羽と劉邦」の価値の証があると考ええる。

（京都府立桃山高等学校）

『史記』を語り物としてとらえる授業  
〜 荊軻伝「秦王環柱走」を中心に〜

安立 典世

荊軻伝では、秦王が逃げる場面に「秦王環柱走」という表現が二度繰り返されている。だが、この柱が何本なのかは諸注を見ても不明である。秦王が一本の柱をまわつたと考えるのと、柱列の間を逃げたと考えるのでは、読みとれる光景に大きな差が生じる。そこで、字義からのアプローチとして、荻生徂徠『訳文筌蹄』を見ると、「環」には「ワノヤウニナルコトナリ、故ニメグルトヨムトキモマワリヲ一遍クルリトマルコトニ用ユ」とある。また、伊藤東涯の『操觚字訣』には、「環ハ囲繞ナリ、ワニナルコト也。」とある。同書には、「旋ハ、イクメグリモヒタモノ、キリキリトメグルコト也」との解釈も見え、何周もぐるぐる回る「旋」と一周する「環」とを区別している。字義からすると一本の柱と考えるのがよいようだが、決め手に欠ける。そこで、授業の中では宮崎市定『身振りと文学』に則り、この場面を語り物とし、あえて一本の柱と読み解いた。というのは、暗殺の場面で柱は舞台の小道具として効果的に

使用されているからだ。柱列のように複数の柱に視点が移動するのではなく、スポットライトが当たったがごとく、一本の柱に読者の視線を釘付けにするために意図的に使われていると考えたのである。一本の柱の表をまわり、裏をまわり、秦王は必死で逃げた、荊軻は夢中でそれを追いかけた。秦王の周章狼狽ぶりを皮肉たつぷりに表現するためにも、柱は一本でありたい。あの残忍な秦王政が、こまねずみのように同じところをまわっている。これほど秦王の逼迫を描ききった演出はなからう。「秦王環柱而走」は二度書かれている。ここで語り手は荊軻となり、秦王となつて同じ動作を繰り返したのではなからうか。そうすると「環」の字義が「輪をかいてひとまわりする」という点もよく理解できる。一本の柱をまわつて逃げていたなら、何周も柱の周囲を回つていたはずである。むしろ旋回するの「旋」の字を用いた方が、状況を表す言葉としては適切だ。だがここに「環」という字が二度とも用いられ「環」が表す字義が「ひとまわり」というのなら、次のように考えられる。語り手は最初に「秦王環柱而走」でぐるりと一周、そして夏無且の動きを説明した後、秦王が逃げ続けているのを強調するために「秦王方環柱走」で再びぐるりとその場を一周したのである。「環」はまさに語り手の動き、息

づかいを映す言葉であったのである。

この後、秦王は剣を抜き荊軻の左股を断つ。荊軻は匕首を投げつけた。そしてそれは銅柱にあたる。ここでも柱は重要な小道具として機能している。更にクライマックスとなる荊軻の笑いは「柱に寄りて笑ひ、箕踞して以て罵りて曰く」と柱にもたれかかつて発されたものであった。

荊軻の秦王襲撃は、すべて一本の柱の周りで演じられた。柱は暗殺場面の重要な小道具であったのである。

(静岡県立浜松南高等学校)

